

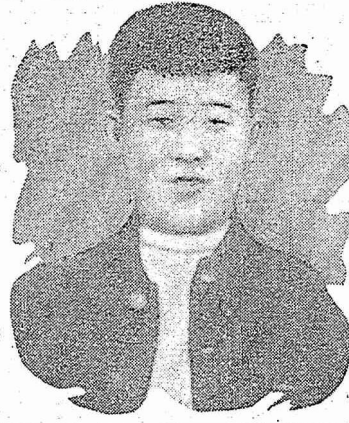
緑の髪をすつぱりと
切棄てた川島芳子嬢

あらぬ「うはさ」を立てられて

固い決心から男装

ある二十三日の火燒。眞實無妄の
の仙州府の安樂料理本亭の本亭の
間に、燒はれ、おのれを笑つた
が、早大御殿を惹きたる／＼切
主の御方殿の御年が「おい女中
さん酒を拵て来い」と云ひに
つさなを拵て来い」と云ひに
きりに、杯を兼ねさせてゐた。や

斷髮姿の川島芳子嬢



老人が
「もつて食へな

老人が「もて食へなければならぬ。嫁が泣きまわると三哥郎を悩ます。嫁は全部料理は親ひでんを喰ふ。さういふ笑し」のままで、お流るゝ主の第三子である。その御殿になつた川島芳子の第三子とよく馴染んでゐた。芳子さんは蘭化して男衆に結んだある。そこには複雑した愛憎がある。そこに大和丸の自己責任、世間のうしろなつた時節、お流るゝ氏が「こんな人は絶対に」とさんぽき氣があるはずはない。世間が愚かに打ち訴すまで儉ししなければ辱むです

描きがあつた。驚いた一同は追

を招いて鹿野手富

を加へた結果、幸ひピストルの弾は外れ、片方を打ち放った矢でけ命を取り止めた。そして、蘭の生を綴りつけた。芳子嬢とは、第の所に愛嬌のけい古く出入したる後、蘭化、出陣との間に、種々のなづからあらねども一つやばは、宣稱が行はれた。女ながら激烈復讐を逞思ひ、使命された。いふ男衆の芳子嬢「自分が出来るか」面影が超へる。数日監獄人の腕をかき下つて自分であつたり。

皇后宮のお心遣

菊花と蜜柑一かこを

きのお東宮妃へお贈り
 待たるい草履殿下の御誕生も
 きた一層の間中か、御誕生
 東宮妃紀は廿六日も、御誕生
 一層の間中か、御誕生
 御政事な御誕生の、大皇
 殿下に御誕生の、大皇
 かひから御誕生の、大皇
 日午後四時三條事務所へ御誕生
 日午後四時三條事務所へ御誕生
 御誕生の、大皇

殺意ではないと

言拔ける被告

首相暗殺の續行公判

[illegible]

御歸航中の
朝香宮

は卅日御着
市中をザツこ廻

市中をサツミ御見物
 【ホノルル特電 二十四日發】 天
 丸で二十四日サンフランシスコ
 出帆の郵船亞細亞第一行は三十
 日朝ホノルル港の傍へ着いたが
 航海時間の都合によりホノル
 ル港に接岸せしむべき三十日午
 三時
 候のはず。ホノルルでは總領事
 市部、郵政局の御案内すべく、
 留宿は、亞細亞の時間なきため
 イオ、郵船を乗上する

★(北米コンソP:0設定用)Asahi Sh
2026/03/15 19:47

(C)朝日新聞社 朝日新聞クロスサーチ・海外版2
本サービスとその収録内容にかかる著作権その他一切の権利は、朝日新聞社または各権利者に
帰属します。無断転載など権利侵害となるご利用はお断りします。
Copyright (C) The Asahi Shimbun Company. All rights reserved.
No reproduction or republication without written permission.